

人権なら

2020年1月1日

第109号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

「なら水平共済」を推進へ

なら人権情報センター理事・支局長会議で確認

NPOなら人権情報センターは11月27日、三宅町あざさ苑で第2回理事・支局長会議を開催。各理事・支局長が出席した=写真。



古川友則・理事長(写真)は、9月の第11回「差別と人権」研究集会に触れ、理事・支局・会員の協力に感謝の意を表するとともに、「次回の研究集会をより充実・豊富化していきたい」と語った。さらに、当面する課題について全力で取り組む決意を表明した。



会議では、議案が各担当者から提案された。「差別と人権」研究集会では、総括会議で出た意見やアンケート結果、寄せられた感想から「今日の世相や経済状況を反映したテーマ設定は関心が高く、好評だった」ことや、今後の運営の在り方などの課題を共有化。支局からの参加について一層の努力を確認した。

河合町人権学習講座や第28回三宅町生き生き交流会などの委託事業についても報告。確認した。

協議事項では、「なら水平共済」の推進について討議。地震や台風による自然災害が増加していることから、会員に対する加入の働きかけを確認。とくに、マイカー共済への加入を図り、家計の負担を減らすことなども検討。そのため、各支局に共済「推進員」を選出してもらい、共済の拡充を進めていくことにした。

このほか、延期になった第40回水平社敬老会、やまゆり園事件の講演会、当面の日程などを確認した。

中企協が確定申告相談会

奈良県中小企業者協会(山下力・会長)は12月14日、三宅町「あざさ苑」で確定申告説明会を開催した=写真。申告相談会は2月6日から21日まで支局会員を対象に下記通り、実施する。その他の会員には2月25日から3月9日にかけて実施する。(次号に詳報)



<2019年度確定申告相談会>

日	時間	会場	対象支局
6 (木)	9:30~ 15:30	天理市人権センター	石上・市場、御経野、嘉幡支局
7 (金)			
10 (月)	9:30~ 12:00	五條市人権総合センター	五條支局
	14:30~ 17:00	西部文化センター	大和高田支局
12 (水)	9:30~ 12:00	若井人権交流センター	平群、生駒支局
13 (木)	9:30~ 15:30	西田中町ふれあいセンター	大和郡山支局
14 (金)			
17 (月)	9:30~ 15:30	杏南町老人いこいの家	奈良・杏南分局
	13:30~ 15:30		奈良・古市分局
18 (火)	9:30~ 15:30	河合町心の交流センター	河合、上牧支局
19 (水)	9:30~ 15:30	三宅町・あざさ苑2階	川西支局
20 (木)	9:30~ 15:30	三宅町・あざさ苑2階	三宅、田原本支局、吉野郡
21 (金)	9:30~ 15:30	三宅町・あざさ苑2階	山添、宇陀、高取、御所支局、直轄、その他の地区

大笑いして楽しんだ敬老会

時節柄の演目「刃傷松の廊下」などを堪能

第40回水平社敬老会が12月15日、川西町コスモスホールであった＝写真。各支局から多くの高齢者が参加。ものまね、歌、漫談、浪曲などを楽しんだ。



植村照子・副理事長が、10月開催の予定が台風19号の到来で延期となり、本日の開催となったと述べ、1年振りの再会を喜び合った。

奈良テレビでお馴染みの谷口吉一さんが司会進行。最初は、大林アキラさんの「ものまね」。石原裕次郎の「夜霧よ、今夜もありがとう」や、デュエット相手を会場から指名して「銀座の恋の物語」などを歌った。このほか、田中角栄や鈴木宗男など、政治家や芸能人の「ものまね」を披露。会場は笑いに溢れた。



次に、漫才コンビ若井ぼん・はやとで活躍した若井ぼんさんが登場。河内音頭で会場を盛り上げ、「憧れのハワイ航路」をみんなで歌った。また、ハーモニカ演奏に合わせて、みんなで童謡を歌い、楽しんだ。

最後は、恒例になった真山一郎さんの浪曲。真山さんは「刃傷松の廊下」を情感たっぷりに演じた。赤穂藩浅野内匠頭が供応役として差配役の吉良に従いつつも、嫌がらせを重ね重ね受け、我慢に堪え切れず、江戸城内松の廊下で刃傷に至るまでを熱弁した＝写真。参加者は聴き入り、大喜びだった。

この日の演目は、本来、昨年約束していた「岸壁の母」を演じる予定だったが、前日が「忠臣蔵」の打ち入りの14日に当たるため、急きょ変更になった。

このあとは、歌謡演歌。「津軽平野」や真山さんの歌「人情街道」、最後に「河内の次郎長」を披露した。

「ヘイトスピーチ」を考える

山本崇記・静岡大学准教授が三宅町で講演

第6回三宅町人権学習講座が12月4日にあった＝写真。山本崇記・静岡大学准教授が「ヘイトスピーチ解消法施行から3年」－課題と対策を考える、をテーマに講演した＝写真。



山本さんは、2018年3月の選挙過程で起こった「ヘイトスピーチ事件」(京都)の写真を示し、「3年前に法律ができたが、いまだこういった事件が起きている」。京都や大阪、東京などの大都市だけの状況ではない。私に関わった「京都朝鮮学校襲撃」は、10年前の12月4日に起きた、と述べ、その「映像」を流した。

「精神的苦痛、心の傷からの回復」過程を説明

京都地裁の損害賠償判決(2013年)、徳島県教職員組合街宣事件(2010年)、奈良水平社博物館前差別街宣事件(2011年)も紹介。ヘイトスピーチに対抗する市民運動の登場や、裁判闘争などを背景に、「ヘイトスピーチ解消法」が2016年6月に成立した、と話した。



NHK番組「朝鮮学校に差別的言動、事件から10年」を取り上げ、当時小学6年生だった女性の「深い精神的苦痛、心の傷からの回復」過程を話した。

ネットにおける人権侵犯事件の状況や、ネット掲示板(部落地名を電子空間に載せ、それを背景とした差別投稿)の現状と、これらをめぐる規制や救済、「選挙活動とヘイトスピーチ」「ヘイトスピーチ規制条例」(川崎市)、「公共施設利用規制」(京都市)を説明した。

最後に、「ヘイトスピーチによる被害実態調査と人間の尊厳保障」「心の傷」(トラウマ)の意識調査や「被害からの回復」としての試みについての話をした。

人も性もいろいろ 性別って？

中田ひとみさんが河合町人権学習講座で話

河合町人権学習講座が12月13日、町総合福祉会館であり、住民・職員ら20数人が参加した。性と生を考える会の中谷ひとみさんが「性別って何？ 人もいろいろ、性もいろいろ」と題して話をした。



中田さんは、まず、自分の性をどのようにして決めているのか、と問い掛けた。性を決めるには「見た目・好きの対象・体の性・心の性＝性自認などを要素にして決まる」。性のあり様は多様だ。しかし、現実には、男と女の選択が迫られる社会であり、「男らしさ・女らしさ」が求められ、傷つく場面が数多くある。「男らしさ、女らしさ」より自分らしさが大切だ、と述べた＝写真。



こころに体を合わせる「自分らしさ」が大切

また、性の問題を考える上で、まず、「言葉を知ろう」として、性的マイノリティーやLGBTQなどの言葉の意味を説明。トランスジェンダーや性同一性障害にも触れた。性別違和について、かつては治療の名目で「からだにこころを無理やり合わせる」ことを様々にされてきた。だが、その効果はなく、今日では、こころに体を合わせるようになった。

性を変えるには、法的には診断書や家庭裁判所での手続きが必要となる。性の多様性を考えると、見た目や勝手な分類などはできないし、しないことが前提となる。カミングアウト(秘密の告白)を受け止められる器量が求められるとともに、アウティング(他人の秘密をばらす)は絶対避けなければならない。

夢や希望が持てる成功や、失敗の体験が豊かに持てる環境、承認経験(自分らしさ)や自信が持てる環境が大切だ、と語った。

「部落史の見直し」を追慕

吉田栄治郎さんが「県民歴史講座」で振り返る

県立同和問題関係史料センターの第6回「県民歴史講座」が12月3日にあった。吉田栄治郎・元所長が「追憶『部落史の見直し』」をテーマに講演した。

1989年、県教委内に「同和問題関係史料調査委員会」が発足。

1980年頃以降、在地史料が大量に発見



され設置された。史料は『奈良県被差別部落史史料集』にまとめられた。1991年、同和教育の手引き(「部落史の見直し」と教育の創造)を発行。1993年、「奈良県同和問題関係史料センター」が開所した。

吉田さんは「20代半ばから県の農村調査を続けてきた」。その中で、「部落」に関わるものが数多く残されていたという。「祭礼の際に主要な役割を果たす部落民。検知帳・名



寄帳に土地所持者として記載される部落民。部落外住民に金銭を貸し出す部落民。部落外住民を小作人として使う部落民、の姿があった」。また、「株仲間に加わる富商、土地集積を進める大地主、何代も続く医者、著名な知識人と交友する部落民の姿も確かめられた。強固な水利権や入会権を持つ部落もあった」。

「部落史の見直し」の目的は①「政治起源説」からの解放②「32年テーゼ」からの解放③情緒的かつ戦略的な部落問題認識からの解放だった。つまり、「部落民絶対善論、総体としての貧困・低位・劣悪論などを生み出したことや、部落の関係を歪なものとした」部落史観の転換を図るものだった。

だが、現状は「不十分・不徹底」で、なお強固に残って再生産を続ける「32年テーゼ」(焼き直し)と、政治・経済・制度への矮小化があると指摘。今後の展望としては、「部落のこと」(部落問題)から「関係のこと」(差別問題)への転換を推し進めることだと強調した。

大阪でピープルファースト大会

ひまわりの家からはメンバー60人が参加

第25回ピープルファースト in 大阪大会が11月29、

30両日、大阪国際交流センターであった＝写真。全国から914人



が集まった。ひまわりの家からは60人が参加した。

実行委員長の山田浩さんが「大会をやってきて、かけがえのないなかまがたくさんできた。辛いときにもなかまがいる。だから頑張れる」とあいさつした。

大会はテーマに沿って進化した。①「ピープルファースト25年のあゆみ」は写真や映像で紹介された②「障害者権利条約」③「優生保護法裁判」では、ひまわりの家のメンバーが裁判支援を報告した＝写真。東京裁判の原告、北三郎さん、仙台裁判の原告、東二郎さんも発言した④「津久井やまゆり園事件」、と続いた。内容はとても盛りだくさんだった。

交流会は、歌って踊って大いに盛り上がった。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新年を迎えた。今年はどうな年になるのか。取り巻く社会状況を見ると、希望は暗い。地球環境にも異変が起き続ける。経済成長が優先され、取り返しが付かない環境破壊が進む。生態系も壊されている。その危機感が日本では薄い。近年、日本も異常気象や自然災害に見舞われ続けている。地球温暖化に歯止めを掛けるために、温室効果ガス排出は削減しないとイケない。人類の課題だ。日本の排出量は世界5位。アフガンの砂漠を緑に変えた中村哲さん。「武器ではなく命の水を」の言葉を噛みしめたい。多くの人々が今の社会を変えようと行動すれば確実に希望は現れてくる。

30日の分科会は14のテーマで実施。第2分科会「津久井やまゆり園事件を考える」では、事件後のさまざまな活動や、施設を出て地域で暮らすなかまの姿が映像で流れた。「人間には一人ひとり、人権があります。すべての人に



生きる意味と価値を考えてもらいたい。私たちは障害者であるまえに一人の人間です。私たちは津久井やまゆり園事件を忘れない！」のことが胸に残った。

今回の大会でも、生き生きと語る当事者たちに元気をもらった。
(ひまわり支援者・吉田裕子)

■35年間続いた「架け橋美術展」が終止符

第35回「架け橋美術展 in 橿原市」が12月8～10日、県橿原文化会館で開かれ、多くの人々が来場した。主催は懸け橋 長島・奈良を結ぶ会/県教育委員会。

会場には、手芸・書道・陶芸・写真・絵画・川柳・俳句・短歌・五行歌・模造拓本・スケッチなど、多数の作品が展示された。また、多くの書籍や



「全寮協 news」、これまでの「架け橋展」ポスターも。

美術展はハンセン病問題の正しい知識と理解を深め、元患者の人たちと私たちの架け橋になることを願い、1982年に始まった。以降、毎年、県内各地で開催されてきた。だが、今回で閉幕となった。

寂しさを感じるが、架け橋美術展で出会い、胸に宿ったことを大切に育てていきたい。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/